九州古墳墓の性格

樋口隆康

〔要約〕古墳文化における地域性の問題は、早くから取上げられながらも、実際にはあまり解明されるところが少なかった。この場合、各地域別の編年基準の設定が、まず考慮されねばならないが、それぞれの地域における資料の貧困が一つの障碍をなしている。私は古墳編年の第一の尺度たる鏡を再操作することによつて、従来の欠陥を克服してみようとした。

九州の古墳墓の実相に対しては、それが古墳文化圏内として、畿内の支配下にありながらも、その間にあつて地域性がいかに発現されるかを眺めてみた。この場合に強調されるのは、周辺文化として、隣接の大陸先進文化圏をひかえていることであつて、それとの交渉が、中心一辺倒からややもすれば離脱せんとする動きをみせていた。その発展は南鮮地域とほぼ同時代的に変化して行つたこと、横穴式石室の発達から推すことができる。

一、地域研究としての九州古墳

九州の古墳墓をここに取りあげた意図は、従来の学界においてつよく要望せられながらも、適切な解答の与えられなかった二つの問題に応ずるためである。日本の古墳墓の研究が、いよいよ精緻さを加えてきたことは、すでに承知ずみのことながら、しかもなほ、優れた先学の諸高著をもってしても、われわれの疑問を十分に満してくれない問題が種々残っている。その一つが地域的分析である。今日の古墳に関する系統的な編年並びに内容の知見は、その主流をなす畿内を中心として理解せられてをり、地方のものに対しては、畿内との対比において、あるいは類似するものがあげられ、あるいは特殊な例が指摘せられるに止まって、それらが各地域における全体のうちで、いかに位置づけら

れるかという点は、あまり顧みられなかった。この地域的分析ということが、今後の古墳研究に与えられた一つの課題であることは云うまでもなく、それが本論の第一の意図である。

この古墳文化の地域性を考えるとき、畿内に次ぐ重要な地点として九州が挙げられる。ここは日本の古墳文化圏内では周辺地域にあたるにもかかわらず、わが上代文化発展の刺戟の源泉となった先進大陸文化圏に接しているという地理的条件と、さらに前代の弥生式時代には、畿内にも優る一大文化圏を形成していたという点で、他の地域よりも重要視されるのは当然であろう。とくに耶馬台国問題との関連において、一般古代史家の関心がとくに強く、これまでの九州古墳文化についての解説も、多くこの問題との関係において眺められている。しかるに、これまでの考古学者の努力にもかかわらず、歴史家たちを充分納得せしめていないのは、その論点が畿内との対比にあるため、つねに畿内的なものの派及、支配という角度から筆が進められていて、九州古墳の全般的性格についての説明が不充分であったからにほかならない。この古代史家たちの要求に応じようとしたのが、私の第二の意図である。[1]

さてこの意図の雄大さにもかかわらず、得られた成果の粗末なのは筆者の卑才にもよるが、一面、主題の資料に対する従来の考古学的調査が、きわめて不充分であったことにも起因する。いま研究史の一端を繙いてみると、九州の古墳が学界に注意されたのは古いが、その学術的調査といいうるものに至っては、数えるほどしかない。報告書の出版されたもののみを拾ってみると、大正元年から同五年にかけて行われた東京、京都両大学の諸先生による日向西都原古墳の調査[2]を第一として、大正五年から八年にかけての浜田・梅原両博士による装飾古墳の調査[3]、大正末期から昭和の初にかけてなされた鳥居博士の日向延岡地方の調査[4]、昭和一一年梅原博士・小林氏の行つた筑前嘉穂郡王塚古墳の調査[5]、昭和二五年小林氏の実施された筑前糸島郡銚子塚の調査[6]などがめぼしいものとして挙げられよう。もちろん、そのほかにも学術的に調査されて、内容のかなり明瞭なものもみうけるが、未だ報告がなく、また各県の史蹟調査報告書や諸雑誌に載せられた資料も多いが、大部分は不用意に発見せられたものの整理報告か、単なる現状の記述に止

まっている。

一方九州古墳文化の性格に対する論究も、早く行われている。古くは浜田博士の論文[7]があるが、もっとも盛んになったのは大正の後半、耶馬台国論争に対して考古学者の立場から積極的に論陣をはられた高橋・梅原両博士の活躍以後である。高橋博士[8]は、由来の極めて古い大和の古墳文化に対して、九州はその末流であったことを、前方後円墳・埴輪・石製品などから論証し、一方漢魏代の大陸文物の受容も、九州は畿内に劣ることを舶載鏡の分布から主張せられた。ついで豊富な資料でもってこの説を敷延されたのが梅原博士[9]である。博士は、九州北部には中国の漢代にあたるころ、特殊な文化相があったが、三国時代には既に廃滅していたとして、それを魏の三角縁神獣鏡や、わが仿製鏡の分布から証明された。これはその後さらに、わが国出土鏡に限ってみられる多数の舶載同笵鏡の研究[10]に発展して、「それらは彼土で同時に作られたものが一括して本邦にもたらされたが、それはまず畿内に入り、そこから各地に分散された」と述べられて、舶載鏡の移動経路から、畿内と九州の関係を暗示された。この論をさらに進展されたのが小林行雄氏である。[11]氏は九州の主要なる古墳の実年代を一つ一つ明確にせられながら、九州における古墳文化は畿内より一、二世紀づつおくれて進展したことを指摘して、畿内文化の九州への伝播の姿を詳しくとらへ、さらに、この畿内文化の普及によって、受容の基礎が確立され、初めて大陸文化が輸入されたとして、横穴式石室墳の出現を考えられた。また同笵鏡についても、梅原博士の畿内を中心とした分散説を採用されて、その分布の実際から、畿内を中枢とする体系を図示された。[12]かくて畿内に発生した古墳文化が九州へ伝えられた経過は、きわめて明瞭に把握されることになったのである。ところで、文化の伝播は必ずしも水の高きより低きに向ふがごとく、スムースに流れるものでないことは、多くの事実の示すところであり、一つの中心文化から周辺地域への伝播は後者の個々の事情によって、迂余曲折があるばかりでなく、逆に低文化地域から高文化地域へ遡行する波もあって、複雑な歩みをとるわけである。史実に徴しても、大和朝廷の全国統一事業は決して容易になされたものでなく、各地にかなりの抵抗をうけ、一たび征服せられた地が、その後もたびたび反抗した事実を知る

のであって、これらの抵抗を産みだす各地域の本質の検討がつよく要求されるわけである。ここにこれまでの畿内の眼を通してみた九州古墳文化から、九州自体に即したその文化の把握がなされなければならない。しかしながら私の立場としても、既述の先学の業績から出発するのであって、古墳文化に於ける畿内の優位性は、毫も疑いなく、その畿内の影響下に発生した九州古墳文化が、一方たえざる大陸先進文化の刺戟をもうけながら、いかなる地方的個性を発揮したかを探るにある。

① 第一の意図に対しては、独自の分析と検討を披歴したが、第二の意図に対しては編輯者からの希望もあり、史学研究会の例会で講述したものを基礎としたこともあって、かなり解説的内容をもたした点をまずおことわりしておかねばならない。

② 『宮崎県西都原古墳調査報告』第一冊（大正4）、第二冊（大正6）、第三冊（大正7）、『西都原史蹟調査報告書』大正15）。なほ同古墳群はその後昭和一一年にも調査されている。『西都原古墳の調査』（日本古文化研究所報告第一〇　昭和15）

③ 京都帝国大学文学部考古学研究報告（以後『京大報告』と略称する）第一冊（大正6）、第三冊（大正8）

④ 鳥居龍蔵『上代の日向延岡』（昭和10）

⑤ 『京大報告』第十五冊（昭和15）

⑥ 小林行雄『福岡県糸島郡一貫山村銚子塚古墳研究』（昭和27）

⑦ 浜田耕作「考古学上より見たる九州の古代民族」（史学雑誌三二の四　大正10）

⑧ 高橋健自「考古学上より観たる耶馬台国」（考古学雑誌一二の五　大正11）

⑨ 梅原末治「考古学上より観たる上代の畿内」（考古学雑誌一四の一、二　大正12）、「本邦古代の状態に対する考古学的研究に就いて」（史学雑誌三六の五、六　大正14）いずれも『日本考古学論攷』所収

⑩ 同博士「本邦古墳出土の同笵鏡に就いての一二の考察」（史林三〇の三　昭和20）

⑪ 小林行雄「古墳時代における文化の伝播　下」（史林三三の四　昭和25）

⑫ 同氏「古墳発生の歴史的意義」（史林三八の一　昭和30）

二、編年の基準

地域的研究で第一に問題となるのは、編年尺度の設定である。最も安易な方法は、すでにほぼ体系の整えられた畿内の尺度をもって計ることであるが、形式学的研究で採用する文化諸要素は、各地域において一律に変遷するとは限らず、ある要素には発展上のラッグ（遅滞）が存在する。たとえば前方後円墳の外形は一つの有力な尺度であるが、九州におけるその変遷は、畿内よりも時間的に一時期おく

れることがすでに指摘せられている。[1] このラッグは一般に遺物においては比較的少いが、遺跡において著しく、またある時期に達すると、ラッグが解消することもある。とすれば、この際、畿内の尺度をそのまま使用することは間違いを犯すことにもなり、どうしてもこの地独自の基準を設定する必要がある。その点で森貞次郎氏が試みられた編年は、[1] 新しき法として注目すべきであろう。

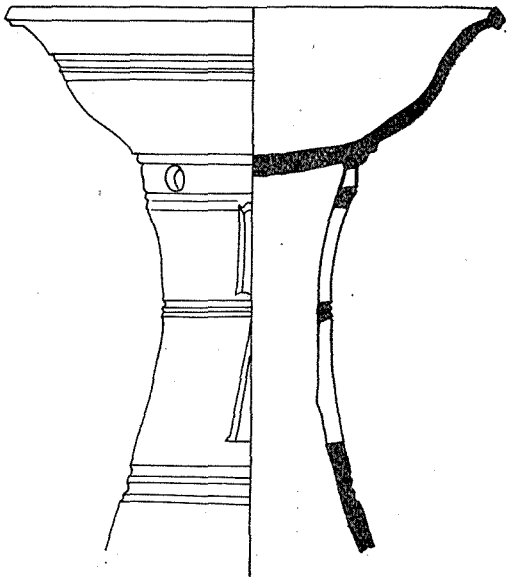
私もまずこれに意を用いた。第一には文献などによって絶対年代の確実なものをとりたいが、畿内における御陵墓のごとき好資料は、周辺域では、むしろ皆無といってもよく、ただ九州では一例だけ、実年代を推しうるものを挙げることができるのは重視されなければなるまい。それは福岡県八女郡長峰村吉田の岩戸山古墳で、筑紫国造磐井の墓と推定されるものである。彼は六世紀の前半、継体天皇二十一年に叛を起し、翌年誅せられたが、生前に造った墓についての記載が、続日本紀にとどめられた筑後国風土記の逸文にあることは、あまりにも有名である。

上妻県、県南二里、有筑紫君磐井之墓墳、高七丈、周六丈、墓田南北各六十丈、東西各卅丈、石人石盾各六十枚、交陳成行、周匝四面、当東北角、有一別区号曰衙頭、其中有一石人、縦容立地、号曰解部、前有一人躾形伏地、号曰偷人、側有石猪四頭、号賊物、彼処亦有石馬三匹石殿三間石蔵二間

本墳は丘陵上に営まれた長さ一〇〇米を越える大前方後円墳であって、その形[2]は前方部がよく発達して後円部に比敵しうるほどになり、空濠をも備えて、畿内盛期の形式を呈している。しかし風土記に記された石人石馬については、早くから九州でも最も数の多い例として知られている。[3] より確かに本墳を磐井の墓と比定する証拠は、風土記の記載中に、東北角に当りて一別区あり、そこに各種の石造物が立っていたとあるもので、それは実際に西面する本墳の後円部右後にあたる東北角に、方形の小台地が外堤に接して存在し、終戦直後開墾されて、鶏・猪・馬・人物・壺鐙・鞍・武器などの形象埴輪[4]とともに石猪・剣柄形石製品などを出したことである。ただこのように注目すべき本墳に於て、最も遺憾な点は、内部構造の不明なことで、もと前後両丘に横穴式石室の存したようではあるが、いまは南側が大きく削られて、知る由もない。副葬品としては、土師器

や須恵器の存在がしられてをり、とくに後者のうちに大形器台（第一図）が著しく、後述の須恵器による編年に結びつけられそうである。（第二型式にあたる）。これが確実な年代の推しうる唯一の例である。

そこで第二の方法として、諸文化要素のそれぞれの形式学的編年を組合せる従来のやり方によるほかない。これについては既述のラッグに対する考慮を忘れずに、資料としては普遍的な遺物が理想であって、その点で古式古墳に対しては鏡を、後期古墳に対しては須恵器を基準として採用するのが、他との比較を試みる際にも好都合であろう。このうち後者については、かって対馬の調査報告[5]で簡単にふれたことがあるので、ここでは鏡に対する新しき試みについてのみ述べてみよう。



第一図　岩戸山古墳出土大形器台

副葬鏡を古墳編年の資料とする場合、伝世ということがあって、鏡の製作年代をそのまま古墳の営造年代にあてることができないことは、梅原博士の指摘によって決定的となった。しかしながら鏡が編年の第一の資料であることには変りがないので、私はこれにある操作を施すことによって、編年資料として再活用することを試みた。その詳細は別に稿を起す予定であるが、それは同一墳における異なる鏡式の共存という事実をとりあげたのである。製作年代の種々異なる鏡であっても、同一古墳に副葬されているということは、その埋葬時には少くともその地で両者が併存していたことを示している。したがってかかる共存例を類集してみて、もしその組合せに、地域的、時間的に変遷して行く、ある法則が認められるとするならば、この組合せ

そのものを一つの地域的編年の基準になしうるわけである。いまその結果をみると、舶載鏡については、近畿では各鏡式がいずれも互に組合されるが、そのうちでも三角縁神獣鏡が中心をなして、それと画文帯神獣鏡（半円方形帯を有する各種神獣鏡を含む）との組合せが最も多く、次いで盤龍鏡、半肉刻獣帯鏡との接触が濃いことがしられる。中部以東でも、絶対数こそ少いが、三角縁神獣鏡を中心として各鏡式が結ばれている点は同じである。ところで九州の場合はどうであろうか。これを具体的にやや詳しく眺めてみると、三角縁神獣鏡の九州出土数の大半を出した豊前石塚山、同赤塚、筑前原口などの諸墳では、赤塚の場合に大形盤龍鏡を一面伴出しているほかは、ほとんど他鏡式を混じえてなく、その盤龍鏡も三角縁で、鏡体では同式とされるから、ほぼ異系統と併存しないといえる。[6]その他の例では、同式の一面のみが仿製の獣形鏡などと伴出していること、豊後大分の亀甲古墳、筑前嘉穂郡の忠隈古墳[7]などによってしられる。次に二種以上の舶載鏡が共存した例では、肥後の江田船山古墳で、半肉刻獣帯鏡、画象鏡、画文帯神獣鏡が伴出し、筑前飯塚市の山神古墳では、平縁盤龍鏡と画文帯環状乳神獣鏡が共存してをり、筑前糸島郡の銚子塚では、内行花文鏡と方格規矩鏡が、多数の仿製三角縁神獣鏡と組合い、肥前平戸の田助古墳[8]でも内行花文鏡が半肉刻獣帯鏡と伴出しているし、これらの諸鏡式は日向の新田原や持田古墳群からも同一地区で出ている。同式鏡のみが二面以上出た例としては筑前五島山古墳の半三角縁の小形二神二獣鏡や、豊前田川郡の採銅所[9]の内行花文鏡などがある。舶載の一鏡が仿製の諸鏡と伴出した例では、肥前谷口古墳[10]では位至三公双龍鏡が四面の仿製三角縁神獣鏡と二面の捩形文鏡などとでてをり、豊後の臼塚[11]でも位至三公鏡が獣形鏡と組合され、筑前の酒殿[12]で獣首鏡が仿製の内行花文鏡と伴出、筑後月岡古墳[13]の半三角小形神獣鏡、肥前玉島の内行花文鏡、同島田塚[14]、横田下古墳[15]の方格規矩鏡がいずれも仿製鏡と伴出している。

以上を整理してみると、舶載鏡間では組合せの中心は半肉刻獣帯鏡、画文帯神獣鏡、画象鏡などで、三角縁神獣鏡が夔鳳鏡や半三角縁二神二獣鏡と同様に孤立している点が注目される。この組合せにおける九州と畿内との差異に対する解釈はあとで触れるとして、いまこれを編年の上にあ

てみるとどうなるであろうか。孤立している類のうち、三角縁神獣鏡と、小形二神二獣鏡は、仿製の獣形鏡と伴出することを通じて、組合せの主流をなす諸鏡と連絡があり、これを群別にすれば、仿製鏡とも結付かない夔鳳鏡副葬を第一とし、次に三角縁神獣鏡、小形二神二獣鏡副葬の類があり、第三に半肉刻獣帯鏡、画象鏡、画文帯神獣鏡、方格規矩文鏡、内行花文鏡などの組合せ主流の群がある。ところでこのように機械的に群別したうちで、同式鏡にかなり製作年代の長期にわたるものが一緒に含まれている。たとえば方格規矩鏡では、筑前銚子塚のそれは漢代盛期の製作と思われるのに、肥前島田塚や横田下古墳の同式鏡は、かなり時代の下るものであり、伴出の仿製鏡にしても前者が多数の三角縁神獣鏡なのに対し、後二者は小形の獣形鏡である。また比較的製作期間の短い類にあっても、三角縁神獣鏡のみを数面出した例は古く、仿製鏡を伴った類はやや、下げてもいいし、小形二神二獣鏡にしても、同鏡二面を出した五島山の方が、多くの小形仿製鏡を伴出した月岡古墳より古いとしていいであろう。しかし相対的にみればさきの三つの群は、時間的先後を示すと考えることができる。

さて以上のごとく、きわめて不充分なものではあるが一応の尺度を設定することによって、九州古墳の編年を考定してみたのであるが、実際には資料の不充分さから、年代の推し得ないのが大部分であることを告白しなくてはならない。

① 森貞次郎「北九州古墳の編年的考察予報」（西日本史学一 昭和25）
② 京大報告第十五冊第二八図参照。
③ 筑後将士軍談巻五十一。
④ 『北九州古文化図鑑』第二輯（昭和26）
⑤ 水野清一、岡崎敬、樋口隆康共著『対馬』（東亜考古学叢刊 乙種第六冊 昭和28）
⑥ 筑前宗像神社沖津宮には古昔から一面の三角縁神獣鏡が方格規矩四神鏡や仿製鏡などと一緒に御金蔵に保存されているが、同一墳の副葬品かどうか知らないので、ここではとらない。
⑦ 森貞次郎氏が最近発掘調査された。同氏の御教示による。
⑧ 拙稿「平戸の先史文化」（平戸学術調査報告 昭26）
⑨ 原口信行「箱式棺内出土の内行花文鏡」（考古学雑誌四〇の三 昭和29）
⑩ 梅原末治「玉島村谷口古墳」（佐賀県文化財調査報告第二輯 昭和28）

⑪ 賀川光夫氏調査。
⑫ 森貞次郎氏調査。
⑬ 『北九州古文化図鑑』第二輯参照。
⑭ 後藤守一「九州北部に於ける古墳」（考古學雑誌一二の四 大正10）
⑮ 松尾禎作「横田下古墳」（佐賀縣史蹟名勝天然記念物調査報告第十輯 昭和26）

三、古墳の分布と地域細分

以上を前提として本論に入るにあたり、九州全島を一つとして理解するよりは、地理的性格や遺跡の特色によって数地区に分けて眺めることが便利である。

第一区、玄海灘に面した筑肥北海岸地区で、東は宗像平野から、福岡、糸島をへて唐津に至る沿岸平野であり、ここは古く末盧国、怡土国、奴国の所在した大陸文化の流入口にあたる。

第二区、東北九州の周防灘に面した沿岸地区で、国東半島から関門地方に至り、国郡制の豊前にあたる。ここは畿内へ通ずる主要通路といえる。

第三区、筑後川流域の広大な平野地帯で、川を遡ってかなり内陸まではいり、東は大分県日田盆地、西は佐賀平野を含み、北は遠賀川上流域の飯塚、直方の諸盆地にも結びついている。

第四区、熊本平野地区で、北の菊地川流域、中央の白川、緑川流域、南の球磨川流域に三分される。

第五区、豊豫海峡に臨む豊後の海岸地区で、小平野がある。

第六区、太平洋の日向灘に面した海岸地区で、ここも北の五ケ瀬川流域の延岡地方（直入郡竹田盆地や熊本県阿蘇郡宮地盆地などの山間部もこの地方に結びついている）、中央の小丸川、一ツ瀬川、大淀川の開く宮崎平野地区、横手川から肝付川に至る大隅の志布志湾沿岸地方に三小区分される。

第七区、西南九州地区、薩摩の川内川流域を中心とし、東は日向の大淀川上流域をも含む。

以上の各地区はいずれも古墳の多く分布する地域であるが、大体が河川の流域か、沿岸の平野を基盤としていることが注意される。この平野の優劣が、それを背景としてたった古墳群を形成した集団の勢力関係と密接なつながりの

存することを、三友国五郎氏が指摘してをられるが、そのなかで東北九州地区をあげて、遠賀川の流域にあたる田川、嘉穂、鞍手の小盆地と、周防灘に面した京都郡平野地区とを比較して、地理的に優れた後者に、より強力な集団の形成される可能性の強いことをあげて、初めは弱小地域団体が各地に成立していたが、そのうちの強力なものが、次第に弱小団体を隷属せしめて行ったという変遷をここに見ようとしているのは、私が後にのべようとするところと対比して興味がある。

しからばさきの地域別の間にも、おのづから勢力の大小、文化程度の差が存することはいうまでもないが、いまその指標の一つとして前方後円墳の数を比較してみると、第一区30、第二区12、第三区53、第四区19、第五区23、第六区90以上、第七区0という数字がでている。[2] この数字はもちろん正確なものではないが、古墳文化、とくに畿内勢力侵透の濃淡を示す一つの指針にはなるであろう。

これらの各地区古墳を比較してみると、第六、第七区の南部九州と、他の北部・中部九州との間には、かなり著しい差異があるようで、大和朝廷の作為的搖籃地とされる前者と、かなり対立的に反抗し、進歩的でもあつた後者の史実と照応して興味深い。したがって本論でも南北を一応切り離して考察してみたいと思う。

① 三友国五郎「古墳群と平野」(考古学雑誌二八の四、昭和13)

② これは各地の考古家からの教示や各県史蹟調査報告書などによって知り得た数字で、もとより正確を期し難いが、大勢は推しうると思ふのである。

四、プレ古墳の存在

古墳の本質を階級制社会を背景にした豪族的なものと考えるならば、畿内の前期古墳にみる属性のうち、高大な封土、細長い竪穴式石室、特殊な副葬品の三要素がいかにして結び付いたかという点に、古墳成立の鍵があるといえよう。それに対して弥生式墳墓の働きかけが一つの問題となっている。これらの甕棺墓や箱式棺墓のうちで高さ三尺から六尺、径三〇尺位の小封土をもった例が第一、二、三の各地区に存在する。[1] それらは多く銅利器を副葬し、当時の墳墓中上位に属することから、階級社会的要素が多少ともみられる原始(プロト)古墳とみるむきがある。また竪穴式石室の構造にしても、福岡県浮羽郡水縄村大塚[2]のごとく、甕棺の外槨に石積

の存するものがあり、これらがまた同時代における中国鏡の副葬事実とともに、北九州の弥生式墳墓のうちに古墳の萠芽を認めんとするのである。しかし古墳は畿内の最初の時期に、すでにさきの三要素が有機的に結びついた定型をとっていて、個々の要素が遊離して一地区に存在していたとしても、それを結びつける文化的凝集力の有無が問題となる。ところが北九州におけるさきの諸例にみた封土が、その後ひきつづいて発展して行く姿は認められないのであって、次の時代の古墳は畿内に成立した定型が入って、初めて雄大な墳丘が出現するのであるから、さきの諸例は単に弥生式末墓制の一局部的現象以上のものでない。したがって一歩譲って、畿内古墳成立の刺戟を外来に求めるにしても、それを特に北九州の局部現象にあてる必要はないのであって、すでに高大な封土を有し、整った石室と豊富な副葬品を納めた大陸の墓制から受けたとする方が、一般的にみて、より妥当ではあるまいか。封土や副葬品としては楽浪、帯方の漢人墓制をあげうるし、竪穴式石室にしても、慶尚南道昌原郡熊南面外洞里③に、磨製の石剣、石鏃、石斧を出した初期金属時代の墳墓がある。したがってさきの北九州の例は原始古墳（プロト）というよりは、むしろ前古墳（プレ）として考えるべきものであろう。

① 鏡山猛「高塚古墳の源流」（史淵五八　昭和28）
② 鏡山猛「原始箱式棺の姿相」（史淵二七　昭和17）
③ 朝鮮総督府大正十二年度古蹟調査報告第一冊（昭和6）

五、北部九州における古墳

1　古　期

九州における古墳文化の開花は、畿内古墳の到来によるが、最古の例の一つとしてよく挙げられるのが第二区の京都郡平野にある石塚山古墳である。前方部の低平な前方後円の外形や、長大な竪穴式石室をもち、多数の舶載三角縁神獣鏡や銅鏃を副葬した点で、畿内前期古墳の諸要素を備えているといえよう。ただ立地の上で、広濶な高台状平原に、封土の大部分を盛上げたという点で形式的に少し下る。竪穴式石室の構造については、大さ（長十八尺、幅三尺、高三尺）は悠に畿内に比敵しうることが推されるが、構造の細部は古昔発掘されたものであるため明かでない。同じ竪穴式石室の古墳で構造の知れる他の例では、第一区の糸島郡銚子塚があり、小林氏に従えば、石室の天井部架工に特

異性があるが、組合式木棺の周囲を板石で囲んだ点で畿内の前期末、中期初のものに類型を求めうるといわれている。そのほかにも舶載鏡をともなった同石室墳が第二、第三地区に相当数みとめられる。例えば森氏の最近発掘された福岡県嘉穂郡穂波村忠隈古墳、佐賀県三養基郡旭村儀徳古墳[1]、大分県速見郡八坂村塚山古墳[2]、東国東郡富来町狐塚[3]、西国東郡草地村鑑堂古墳[4]などがあるが、いずれも短い石室で、到底畿内のごとく粘土床の上に丸太様木棺を入れた長大な石室の類ではない。しかも儀徳古墳、塚山、狐塚の諸例にみるごとく、側壁の一部に板石を縦に並べた構造があって、箱式棺と系統上のつながりを考えさせるものであり、同じような構造が対馬の仁位村曾蒙古塚その他にも二三みとめられた[5]。

畿内中期の形式である長持形石棺をかこった幅広の竪穴式石室になると、典型的なものが筑後月岡古墳にあって、これは副葬品からしても全く畿内的といっていい。同じ長持持石棺をともなった肥前谷口古墳は、石室が割石小口積合掌式天井という特殊なものである。

石塚山と同じ規模と古さとをもつ第一区の赤塚古墳[6]は、主体が箱式棺である点が異なるが、箱式棺が九州の前代からの伝統的墓制とすれば、これは畿内的なものと、九州的なものの混合形式とも考えられるであろう。このように高大な前方後円墳や円墳に箱式棺を設けた類が、遠賀川域の田川郡勾金村位登[7]古墳、佐賀平野の小城郡小城町宮戸古墳[8]、佐賀郡松梅村高畑古墳、国東半島の灰土山[9]古墳、重光古墳、塚山古墳、北海部郡の築山古墳、上ノ防古墳などの各地に散在している。

これらに対し同じ箱式棺を主体とするが、全く封土を持たないか、あっても小円墳で、うちに鏡などを副葬した純伝統的墓制がより広い地域にみとめられる。後漢代の内行花文鏡を出した嘉穂盆地の谷頭古墳[10]とか、夔鳳鏡の出土でしられている漆生古墳[11]をはじめ、田川郡の宮原古墳、玄海灘沿岸では宗像郡の上高宮古墳[12]、糟屋郡の酒殿古墳、同谷蟹古墳、福岡市の五頭山、同藤崎、筑後平野では朝倉郡石成、佐賀平野では春日村森上古墳[13]、対馬志多留の大将軍山[14]古墳、大分の亀甲古墳、宇佐郡の法鏡寺古墳などかなりの数にのぼっている。

同じ伝統的なものとして石蓋土拡[15]のうち、豊前京都郡犀

川町や小倉市長行の例も鏡や鉄斧・鉇などを出していて、この類に含めていいであろう。

以上は、四世紀代に初めて東北九州の一劃、周防灘沿岸に橋頭堡を築いた畿内古墳が、次の約一世紀間に筑肥北海岸地区、筑後川流域地区、豊後地区に次第に侵透して行く姿であるが、しかしそれは何等の抵抗もなく、容易になされたのでは決してなかった。最も畿内的な古墳の存在する地区の隣りには、九州の伝統的なものが併存していたことが知られる。例えば周防灘沿岸地帯と山一つ距てた香春盆地や嘉穂盆地には、石塚山古墳と同じ時期に、伝統的墳墓（谷頭古墳、添生古墳など）の存在が知られる。また畿内文化を比較的すなほに受入れた地域（糸島平野や筑後川上流域）と、かなり後まで抵抗していた地域の区別も立てられるようである。しかし、この後者にも漸次、畿内の勢力が進出して行ったことは、鍬形石（大分築山古墳）、琴字形石製品（佐賀森ノ上古墳）、子持勾玉（福岡早良郡）などの畿内的遺物が散見することからも云えるのであろう。かくして、五世紀前半には畿内文化が北九州に全般的に拡がったことが認められるのである。

2 後期

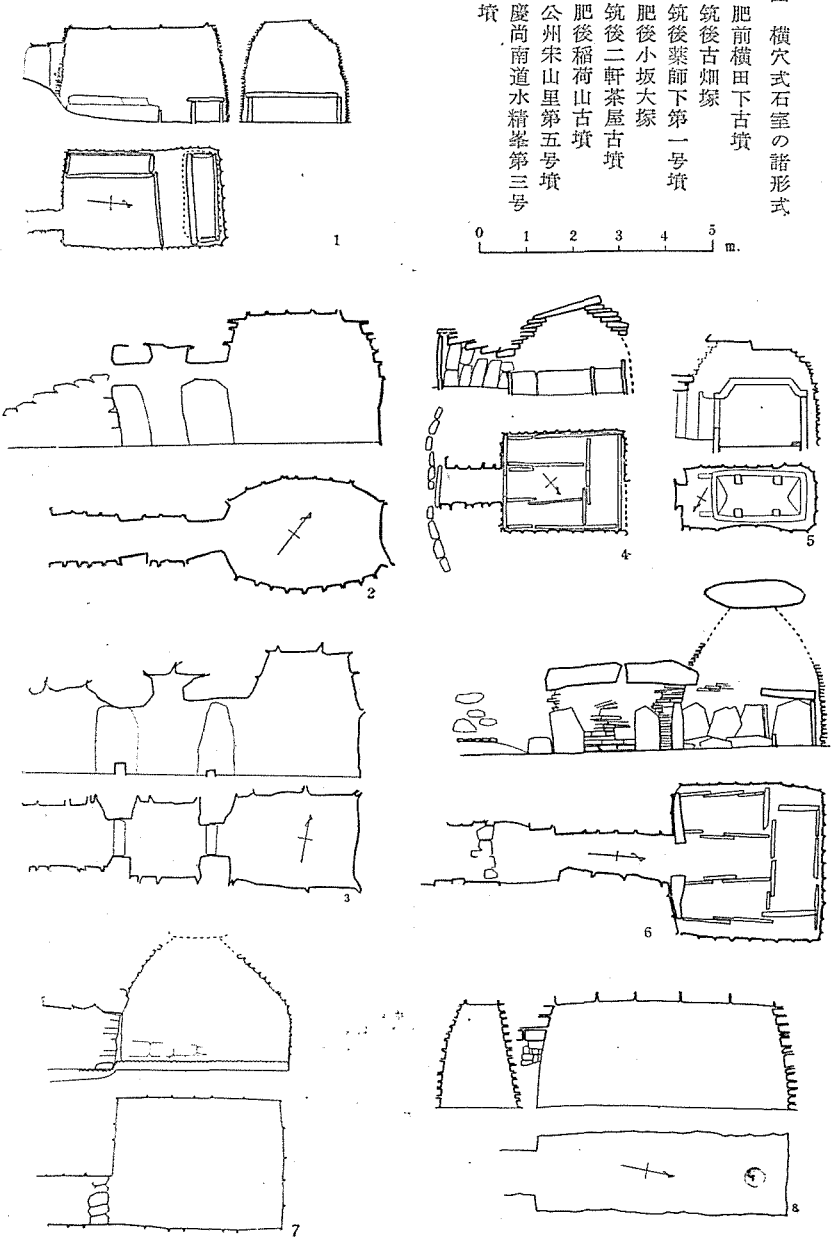
横穴式石室墳の出現は、それが古期のものに比して単に構造上の変化のみならず、その祭りの意義においても異っている点で、古墳文化期上の一大変革を生じたことはいうまでもないが、それが北九州において畿内に先行し、しかも畿内以上の多様さと華麗さを誇ったことは、強調されねばならない。しかしそれは決して九州で発明されたものではなく、大陸からの輸入である。したがってその先行性、多様性のみをもって九州の優位を示す証拠にならないことは、その内容を検討してみればおのずから明かであろう。横穴式石室墳の最初の例を筑肥北海岸地区に見るのは、ここが常に大陸文化の流入口である点からうなづける。東松浦郡浜崎町横田下古墳と糸島郡周船寺村丸隈山古墳がそれであるが、両墳の石室構造はきわめてよく似ている。（第二図1）長方形のプランをした玄室に、短かい羨道がつき、壁は割石の小口積で、長側壁は上に向うに従って次第に内方に持出され、横に架した数個の天井石を受けているが、奥壁はむしろ垂直に近く、いわば蒲鉾形天井に似た趣を呈

している。その点で同地区の谷口古墳の合掌形天井との関係をも思わせるが、百済の古墳中に公州宋山里大墓や扶余陵山里伝王陵群（中下塚）の類型がとくに注目されよう。同じ構造がまた佐賀平野[16]（神崎郡三田川村塚山、目達原古墳群中の大塚）にもあって、興味深い。ところでこれらの副葬品をみると横田下の筒形銅器、丸隈山の巴形銅器など、いずれも畿内文化に特色のある遺物を含んでいて、この新要素の受容は、すでに畿内の勢力下にあったこの地の進歩的豪族によったことが推されるのである。その年代については、丸隈山に対する小林氏の比定があるが、横田下も筒形銅器の年代や、鏡の副葬、土器として、まだ須恵器を伴はないで、土師である点などから、ほぼ同じ五世紀中葉頃としていいであろう。

この横穴式石室は一たびわが国に受け入れられるや、急速に普及して行くが、北部九州にあっても五〇〇年前後から多様な形式を産み出して行った。これらを構造原理ならびに系統上から二種に分けることができる。すなわち長方形プランの玄室と正方形プランのそれとである。両者は立面形においても天井石の受け方に相異があって、おのづから違った手法をとることになる。前者（第二図3）では天井は数個の横長の石を左右の両壁に架け渡して前後に並べるため、とくに左右壁の上方部を持出してくる。それを板石で築いた場合はアーチ形となるが、一般には栗石を使うことが多く、断面は梯形となる。ところが正方形プランの場合（第二図4）、天井は中央に一石あるのみで、これをうけるために、板石を小口に積んで四方から空間をちぢめてくるので穹窿形天井となる。遺骸安置の設備にしても、長方形室では奥壁正面が主となり、ここに石屋形を造り出したり、石棺を安置したり、合葬の場合でもこれに平行して置かれることが多い。ところが正方形石室では主葬が奥壁に接した面である点は同じだが、左右両壁に接する面も重視されて、ここにも合葬され、内部を障壁によって四区に分けている。ただ以上の説明はあくまでも構造的にみた原則であって、混合形式もあり、また両者とも単室のほかに複室が多い。しかし前者は筑後平野を中心として遠賀川上流域、豊後海岸地区にも及んでいるが、後者は熊本平野を中心とし、一部筑後地区にも存するという分布上の差異と、前者が大陸の墓制では高勾麗や百済の石室墳と系統上のつ

第二図　横穴式石室の諸形式

1、肥前横田下古墳
2、筑後古畑塚
3、筑後薬師下第一号墳
4、肥後小坂大塚
5、筑後二軒茶屋古墳
6、肥後稲荷山古墳
7、公州宋山里第五号墳
8、慶尚南道水精峯第三号墳



ながりを考えうるのに対し、後者は楽浪、帯方の塼槨・木槨両墳に関連をみる点で注目されよう。しかし筑後川上流の浮羽古墳群中の古畑塚（第二図2）、鳥舟塚、珍敷塚、富永古墳などは長方形の単室墳の両側壁が、塼槨墳的な胴張りを有してをり、また特殊な混合形とすべきであろうか。

さらにこの両系統には、石室内が色彩または線刻で飾られることがある。前者の系統は、ほとんど色彩画で占められるが、後者では線刻文の上に彩色を施しているものが多い。主題には円・同心円・三角文・蕨手文・双脚輪状文・直弧文などの幾何学的図案のほか、楯・靫・刀・弓などの器具や、人物・舟・鳥獣・家などがある。この墓室の色彩画も、また大陸の墓制にみることは有名で、中国の漢代墳墓をはじめ、高勾麗、百済にもみうけるが、それらは四壁に四神図を配するか、あるいは天井を星界にかたどったり、室内を家屋構造に仕たてて、各種の風俗画を描いているのが多く、いずれも計画的に配図されるのに、九州の例は、一部には嘉穂郡王塚のごとき配図上の計画性をみとめるものもあるが、多くは壁面や障壁や石棺に、赤、青、黄、黒、白などで自由に描いている。主題の上にも王塚の星文や浮羽郡珍敷塚の蟾蜍文[17]のごとき、高勾麗のそれと全く一致するものがあって、それらが系統上のつながりを示すとしても、ほとんどはわが国特有の図文であって、この大陸の色彩の濃い装飾古墳の受容者はやはり畿内文化につちかわれた人々であったことが、とくに直弧文の存在などからもいえるであろう。

畿内要素と大陸要素を九州がいかに折衷したかについては、また別な資料がある。横穴式石室と前方後円形とが、その向きにおいて本来相いれないことは、梅原博士らの指摘されたところであるが、最初の例の一つである丸隈山古墳では、石室の入口が外形の正面にあたる前方部に向って開いている。また次にのべる横口式石棺の肥後江田船山古墳、筑後石人山古墳でも同様である。それは極めて不都合なことではあったが、墳丘の上位に、しかも短い羨道をつけることによって、最初の例としてはあくまでも受け入れたままの形を保持して、両者の正面性を一致させようと努力したのである。ところが横穴式石室においては、祭りの場所の相異から、墳丘の正面性を考慮する必要がないために、次の段階では筑前嘉穂郡王塚、肥前東松浦郡島田塚、

肥後鹿本郡チブサン古墳などの横穴式石室や、筑後三井郡二軒茶屋古墳の横口式石棺など、いずれも前方部を避けて、後円部の側方や後方に開口するに至ったのである。

この横穴式石室の思想は石棺構造のものへも侵透して行く。阿蘇山を中心として阿蘇熔岩の産する地域は、それを材とした石棺の多い地方として、とくに西の熊本平野、東の延岡地方があげられるが、前者においては玉名郡睦合村院塚[18]における三個を著例とし、同江田中小路、下益城郡杉上村、筑前糸島郡鹿家、同吉井などにある舟形石棺や、肥後宇土郡楢崎の三棺をはじめ、より例の多い家形石棺[19]などが著しいが、この石棺の短辺に口を開いて、その前に簡単な両壁を設けたものとして、肥後の玉名郡江田船山古墳、下益城郡石之室古墳[20]があり、それを長方形の玄室内に収めたのが筑後の石人山、石櫃山、二軒茶屋古墳（第二図5）などである。また石棺の長辺に開口して石室の奥に安置したのが肥後玉名郡江田町塚坊主古墳である。

以上のほかに大形扁平石を箱形に組合せた天井の低い石室に開口して、天井のない短かい羨道をそえた類が、また佐賀、長崎の両県から熊本平野にもみとめられる。[21]

末期になると横穴式石室も、さきの特色ある構造が少くなって、江田穴観音の如く切石でつくられたものもあるが、多くは一度畿内に及んで畿内化されたものが、逆入してきて各地に散在する。それは巨大な石を以って築かれたものであり、筑前宮地嶽古墳などは最も著しい。また横穴の群集も各地に存在し、地下式古墳も豊前や肥後にみとめられる。

さてこの横穴式石室墳において、北部九州が畿内に先行して特殊な発展をなしたことについて、次に解釈せねばなるまい。歴史学者[22]たちによって言われているごとく、当時の北部九州の地方権力者たちは、磐井の叛乱を一つの象徴として考えられるように、大和朝廷の支配に対して、かなり独立的であり、反抗的であったという解釈と結びつけることも可能ではあるが、ここでは一応純文化的に意味づけてみよう。当時の北部九州がすでに大和文化圏内にあったことはいうまでもないが、ただそのなかの周辺地域であった。周辺文化は中心文化の支配とともに隣接文化の影響をも受ける特殊な地帯である。そこでこの接触した南鮮の文化に眼をむけてみる必要がある。わが国と最も関係の深か

った百済、任那については、今日充分の資料[22]がそろっているとは言えないが、横穴式石室のうちには、構造上北部九州のものと一致するものがあり、またこの式の出現はわが国の場合とほぼ同じ頃であったことが注意される。例えば百済の最初の首都広州附近では広州郡中坐面可楽里第二号墳や高陽郡蘇島面中谷里古墳などは、長方形玄室で羨道短かく、玄室の前壁は垂直で、奥壁もそれに近く、左右壁はより内傾していて蒲鉾形に近い趣を呈している。第二の都公州でも宋山里伝王陵といわれる一墳は典型的蒲鉾形天井をした塼築墳であって、内に四神を描いている。これに隣接した四、五の大形墳は板石をもってした方形穹窿形天井石室（第二図7）で、壁面には漆喰を塗り、棺台を設けなどして、高勾麗を通じて楽浪塼築墳に結びつく。さらに最後の都扶余附近では陵山里にある伝王陵群にあっては、そのうちの中下塚は蒲鉾形天井を呈し、他の通有な石室がまたこの系統をうけているという。かくみれば百済における横穴式石室は漢城時代（A.D. 350頃—475）にすでに存在しているが、それが高勾麗からの影響とすれば、やはり平壌遷都（427）以後に生じたことになり、五世紀の前半を遡らないし、とくに穹窿形天井式が公州時代（475—538）の王者の奥城にとくに著しいのは、わが国の同形石室がほぼ相似た短期間に限定されることと照応するのである。

次に任那地方はさらに資料に乏しいが、長方形のプランで前後壁が比較的垂直に近く、左右壁を持出している蒲鉾天井式に近い横穴式石室がある。慶尚南道晋州郡道洞面水精峯第二号墳、第三号墳[23]（第二図8）や慶尚北道高靈郡池山洞折上天井塚[24]などがそれである。一体南鮮と北九州とは文化の進展もほぼ同じ歩調をとっていることは、弥生式時代における農耕の出現や、金属文化の流入などについても言えることである。したがって横穴式石室の採用も、この五世紀代に北部九州が畿内文化の伝播により、初めて受容の態勢が整った後に入ってきたわけではなく、かかる文化的地盤は、早く独立小国家も形成され、地方権力の凝集も行われた前代の弥生式文化期に完成されていたのであって、横穴式石室は南鮮に伝えられたと同時に、北部九州にも及んだと解すべきではなかろうか。

しからば次に考えるべきことは、わが国墓制を根本的に変えたこの新要素の受容を、畿内がなぜ北部九州よりも遅

らせたかという点であろう。これについては遺物の場合、須恵器、金銅製宝飾具などの南鮮系文物が九州と同時に他の地域に及んでいることを思えば、墓制の構造のみに遅帯がみられるのは、遺物と遺跡の派及上地理的巨離の差異があるためかもしれないが、一面畿内と北部九州との大陸に対する関係を考える必要がある。当時の大和朝廷は倭の五王の派遣でも知られるごとく、政治的には中国への憧憬がつよく、南鮮に対してはかえって指導的立場にあった。したがって文化的刺戟も、まず中国に求めたことは当然であって、かの中国鏡が南鮮になくてわが国にのみ出土するという特殊事情が、その間の説明として充分であろう。しかしその交渉は多分に外交的、公的なものであった。ところが北部九州は表面上は畿内を通じての交渉ではあったが、他面地理的にめぐまれていたために、表面にでない私的、直接的交流もあったのではなかろうか。応神紀に大和朝廷が阿知使主を呉に遣はして縫工女を求めしめたとき、四人を得ての帰途、筑紫に立ちよった際、胸形大神（宗像神社）の乞によりて、四人のうちの第一の兄媛を奉り、残りを大和に連れ戻ったという記事は、大和朝廷の輸入を途中でかすめ取った例として注目される。この宗像社がスサノオノ尊の系統であることも留意されよう。また仲哀紀八年の条の伊覩県主の祖五十迹手が五百枝の賢木の中枝に掛けたという白銅鏡も、天皇に献じたのであれば、以前に大和から分配されたものではおかしいわけで、自ら手に入れた宝器であったにちがいない。このようにみてくると、さきに副葬鏡の組合せの際にみた畿内とちがった九州の現象が回想されてくる。三角縁神獣鏡は、九州では他の鏡式と同伴することが少いのに、畿内では各形式の鏡と組合わされ、とくに製作年代の下る画文帯神獣鏡との伴出が目立っていた。しかし畿内でも三角縁神獣鏡が一墳から数面でて、これらが他の鏡式と共存する場合は、時代の遡る鏡とである例がかなりある。このことは、同式鏡の埋葬の時期には、輸入されて後、分配・伝世があまり進まない比較的早い時機に副葬されたものと、しばらく伝世して、画文帯神獣鏡の輸入後に埋葬されたものと、二期あることを暗示するようである。しからば、北部九州の場合、三角縁神獣鏡のみが数面でる類は、同式鏡埋葬の第一期にあたるわけである。このように、三角縁神獣鏡の伝世があったにしても畿内ほど

著しくなく、分配・伝世以前と考えられるものが存するのは、これらがすべて畿内を通じて輸入されたとするよりは、そのうちには北部九州の豪族が直接輸入したものもあったのではないかと思われる。いわば北部九州の大陸文化に対する関係は私的、社会的であったのに対し、大和朝廷のそれは公的、外交的であり、しかも南鮮に対してよりは、中国への熱意がより強かったのではなかろうか。しかも大和文化はいずれにしても一つの完成された文化であり、外来新文化の受容に際しても自己流に消却する能力を有してをり、それだけが時間的ずれを生じたとも解される。とすれば北部九州の横穴式石室の多様さは、大陸の諸形式があまり変形されることなく、同時代的に採用されたためであり、このことは、かえって九州の個性の弱さを示すことになるのかもしれない。

① 佐賀県報告第八輯（昭和24）
② 大分県報告第二輯（大正12）
③ 賀川光夫「大分県に於ける三つの竪穴式石槨を有する古墳」（西日本史学一五、昭和28）
④ 南善吉「鑑堂古墳について」（考古学雑誌一三の一二大正12）
⑤ 水野・岡崎・樋口前掲書参照
⑥ 梅原末治「豊前宇佐郡赤塚古墳調査報告」（考古学雑誌一四の三　大正12）
⑦ 福岡県報告第九輯（昭和9）
⑧ 佐賀県報告第八輯
⑨ 河野清実「豊後西国東郡田原村灰土山の古墳」（考古学雑誌五の一一　大正4）
⑩ 児島隆人「内行花文鏡を出せる箱式棺の新例」（考古学八の一　昭和12）
⑪ 柴田喜八「筑前漆生の古墳群」（考古学雑誌一七の二　昭和2）
⑫ 福岡県報告第一三輯（昭和14）
⑬ 佐賀県報告第八輯
⑭ 駒井和愛、増田精一、中川成夫、曾野寿彦「考古学からみた対馬」（『対馬の自然と文化』昭29）
⑮ 鏡山猛「石蓋土壙に関する覚書」（史淵五六　昭和28）
⑯ 佐賀県報告第九輯（昭和25）
⑰ 史林三三の三、七二頁（昭和25）
⑱ 坂本経堯氏調査。同氏の教示による。
⑲ 小林行雄「家形石棺」（古代学研究四、五、昭和26）
⑳ 梅原末治「肥後の二古墳」（史迹と美術一六の三　昭和21）
㉑ 松尾禎作氏らが只字式石室と呼んでおられるもので、私の調査した平戸生月島の古墳もその一つである。
㉒ 井上光貞「国家の成立」（日本歴史講座第二巻　昭和26）藤間生大『日本民族の形成』（昭和26）、林屋辰三郎「継体欽

明朝内乱の史的分析」（立命館文学9　昭和27）

㉓ 軽部慈恩「公州に於ける百済古墳」（考古学雑誌二三の七、九、二四の三、五、六、九、二六の三、四、昭和8—11）野守健『公州宋山里古墳調査報告』（昭和二年度古蹟調査報告第二冊）、梅原末治『朝鮮古代の墓制』（昭和22）

㉔ 『朝鮮古蹟図譜』第三（大正5）

㉕ 梅原博士前掲書　図版第二九

六、南部九州の古墳

日向大隅を中心とする南部九州は北部九州との関係が極めて薄い。文化交流の主道からはずれた僻遠部にあたるため、発達はおくれ、古い文化が長く停滞する保守的な地域であり、専ら畿内文化の支配をうけ、大陸に対しても直接あるいは北部九州を経由することなく、すべて畿内を通じてであった。

この地方に古墳文化が入っていったのは、畿内における中期と言われる時期であった。古墳の分布も甚だ濃密で、前方後円墳なども多く存して、うちに前方部の細長い柄鏡式ともいうべき古式も存する。

内部構造として竪穴式石室は南部日向に二三知られてをり、福島平野の油津町古墳からは画文帯神獣鏡を出しているが、石室の詳細はわからない。竪穴式石室内に石棺を収めた式は、大隅肝付平野[1]の唐仁の大塚や大崎町横瀬古墳がある。その石棺はこの地方に特有な亀甲形であるが、短甲などを副葬し、畿内の長持形石棺を収めた石室に通ずるものがある。

しかしより普遍的なのは粘土槨である。中部日向の西都原では第十三号（旧二号）墳、第七二号（旧二一号）墳[2]があり、いずれも割竹形に窪んだ長大なもので、全長二〇尺内外あり、前者から仿製の三角縁獣帯三神三獣鏡、後者からは仿製方格規矩四神鏡がでている。東諸県郡六野原古墳群[3]も、多くが同式で、もっともよく残っている第六号墳の槨の長さは一四尺あり、鋲留式短甲、革綴式衝角付冑、素環頭太刀などを副葬していた。北の延岡地方[4]にも多くの粘土槨がある。長さ二二、五尺もある浄土寺山古墳では槨底が割竹形に凹んでいて、革綴の短甲と眉庇付冑、竹櫛などを出しているが、他は一般に、長さ一〇尺から六尺位の短い式で、恐らく組合式木棺を主体としたものと思われる。い

ずれにしても、畿内中期の特色がきわめて強く反映しているものといえよう。しかし粘土槨が北部九州に乏しいこともこの際忘れてはならない。

この地の地方性として極めて特色のつよい地下式古墳も、ほぼ同じ頃出現していて、六野原においては既述の粘土槨墳の下位にこれがあり、そのうちの第八号墳、第十号墳などは長方の玄室内に粘土床を設け、小形仿製鏡、短甲、眉庇付冑、鹿角刀装具、鍬先、斧頭などを副葬し、別に獣首鏡が同じ古墳群中からでている。これらが地方的特殊な形式にもかかわらず、遺物の内容は全く畿内的である。この種の古墳は後期になると四方に拡がり、肝付平野[5]では、この地特有の軽石製組合石棺をそのうちに安置したものがあり、薩摩の川内川上流の大口盆地では、地下に板石を積上げた石室があって、一変形をしめしている。[6]

いま一つ特色のあるものとして石棺がある。石材として北の阿蘇熔岩、南の軽石の産する地域に発達が著しい。北は延岡を中心とする地域で、西九州の熊本地方と同じ材料を使用し、形式の上でも舟形・家形等通じているが、細部においては異なり、作りも粗製鈍重で、横口式の手法もみられない。したがって両者の関係は比較的うすく、むしろ畿内石棺からの影響によって産れたのが、たまたま熊本地方のものと材料を同じくしたと思われる。

肝付平野に多い軽石製の石棺は、またちがった形式をとっている。いま高山町新富西横間和田上古墳について説明すると、厚さ二寸の用材を一尺四方大の方形石に切り、それを数個ならべて床、側壁をつくり、蓋も数石を合せて全体を長楕円形の亀甲形に造作してある。この種の石棺が各所に存して、地下式土墳中にも納められている。

横穴式石室墳は北部九州ほど豊富ではない。著明なものとして中部日向の西都原第二〇六号墳（鬼の窟）、上穂北村千畑の桜田塚、新田原の石舟塚[7]、南部の細田村八反田の鬼窟、北部の東臼杵郡に二三知られている程度である。構造も北部九州の特異形式とことなり、畿内式の巨石を積上げた両袖式、無袖式のものである。副葬品も須恵器のほかに金銅装の大刀などがある。

① 木村幹夫「大隅に於ける前方後円墳に就て」（考古学雑誌二五の五　昭和10）
② 宮崎県報告第一冊。
③ 同前第十三輯（昭和19）

④ 鳥居博士前掲書

⑤ 瀬之口伝九郎「九州南部に於ける地下式古墳に就いて」（考古学雑誌九の八　大正8）

⑥ 曾野寿彦、中川成夫、佐藤達夫「鹿児島県伊佐郡羽月村下殿古墳発掘調査報告」（考古学雑誌三六の二　昭和25）、寺師見国「鹿児島県伊佐郡焼山古墳」（日本考古学年報1　昭26）

⑦ 宮崎県報告第十一輯（昭和16）

結

以上南北にわけて九州の古墳墓を概観したが、全体を通じてみたとき、畿内的基盤の上に立ちながらも、北部九州においては、それに大陸的要素が加えられ、それと畿内的なものとの交渉のうちにこの地の個性が発現したと考えられる。しかしそれは決して畿内の優位性を否定するようなものではなかった。横穴式石室墳の華麗な発現も、それが南鮮と一体になって動いたための現象であって、北部九州の独自性にたつものではなかった。また三角縁神獣鏡のあり方に畿内と九州の間にみた相異も抜本的なものでないこと、既述のごとくであるとすれば、絶対数において畿内が多いことは、それを副葬した古墳築成の時期には、畿内が文化の中心をなしたという従来の考古学者の説を否定することはできない。それを藤間氏[1]のごとく、北九州に輸入された鏡が、畿内によって征服されると共に、略奪されて畿内に多くもち去られたとして、かえって邪馬台国北九州説の傍証にしておられるがごとき所論は、遺物資料の現象的理解という考古学的論究の本質を理解せられないものというほかはない。略奪によつて一国の文化要素を徹底的に運び去り得ないことは、ローマの強力をもってしても、ギリシヤの彫刻をギリシア本土から抹殺し得なかった一事実をあげるだけで納得されるであろう。したがって私見をもってすれば、邪馬台国所在論も、卑弥呼の時代を古墳文化期とする立場にたつかぎり、三世紀前半の古墳の確実な存在が証明し得ざる今日においては、いまだ断定の時期に達しないと云わざるを得ないであろう。

① 藤間生大『日本民族の形成』一八八頁

【お知らせ】 史学研究会の振替番号が京都五一五五番に変りましたので、会費御納入の際は御注意下さい。

Some Features of the Tumuli in Kyûshû (九州)

by

Takayasu Higuchi

The tumuli-culture of Kyushu, although essentially belonged to the cultural circle of Yamato (大和), was under influence of the advanced continental civilization because of the geographical background. The extension of Yamato culture into Kyushu area was not always straight-lined.

In Kyushu, there are small mounds of the preceding Yayoi (弥生) tombs (urn-coffins and cists), and some archaeologists assume that these are of the original type of the mounds, calling it "proto-Kofun". But tombs of this kind appeared only locally even in Kyushu and disappeared without any further development. So we prefer to call this type "pre-Kofun".

Real tumuli like Zempokoenfun (前方後円墳) of Yamato came to be built late in the 4th century in Kyushu, half a century later than in Yamato. This type of tumuli appeared first along the north-eastern coast of the island and gradually prevailed in other districts where the traditional type of cists without mound was still survived.

As for the chamber tombs-type it came into use earlier and developed more variously in Kyushu than in Kinai (畿内), because it had been introduced from the Continent. This does not mean that the culture of Kyushu was higher than that of Kinai at that stage. The fact is that the inhabitants of northern Kyushu were very fast to copy the culture of southern Korea, but could never creat a culture of their own and always belonged to the cultural circle of Yamato.

Southern Kyushu, culturally very little connected with northern Kyushu, developed its culture under the strong and constant influence of Kinai culture.

heT Debasement of Currencg by the Edo (江戸) Government at the Genbun (元文) Period

by

Tasaburo Ito

The period from Genroku (元禄) to Kyoho (享保) saw the development of modern money economy, but it suffered from the confusion of